

唐代女性詩人 薛濤の没年を巡って

詹 満江

一、次の劉禹錫の詩題はどのように解釈すべきか

辛島驍説

和西川李尚書傷韋令孔雀及薛濤之什

西川の李尚書の韋令の孔雀を傷む及び薛濤の什に和す

張篷舟説

和西川李尚書傷（韋令）孔雀及薛濤之什

西川の李尚書の（韋令の）孔雀及び薛濤を傷むの什に和す

*劉禹錫が和した李徳裕（と薛濤）の詩は、今に残っていない。

張篷舟氏は『全唐詩』に拠っているので、「韋令」の二字がない。

張氏のように読むと、劉禹錫は李徳裕の「孔雀及び薛濤を傷む」

という題の詩にだけ和し、孔雀と薛濤は死んだことになる。

二、張篷舟説の概要

韋臯が劍南西川節度使だった初期（貞元元年七八五）、南詔から孔雀が一羽献上された。韋臯は薛濤の意向に沿って、節度使宅に池を掘らせ籠を設けさせて孔雀を飼った。大和五年（八三一）秋、孔雀が死に、次の年の夏、薛濤が死んだ。

武元衡が劍南西川節度使だったとき（元和二年八〇七）、「四川使宅に韋令公の時の孔雀の存する有り焉、暇日諸公と共に翫べば、座中に故府の賓妓を兼ね、興嗟すること之を久しくす、此の詩を賦し、用いて其の意を廣くす」と題する詩を作り、『全唐詩』の武元衡の詩の中に現存する。詩題の「座中兼故府賓妓」及び「美人傷蕙心」の句は、薛濤を指すのではなからうか。薛濤には武元衡と唱和した詩が三首残されているが、韋臯の孔雀を詠じた武元衡の詩に唱和した薛濤の詩は残っていない。武元衡のこの詩に唱和したのは、白居易、韓愈、王建であり、みな孔雀を詠じているだけである。しかし、王建は孔雀と薛濤の事情を知っていたらしく、七古一首も作っていて、「美人為爾別開池」、「雕籠玉架嫌不棲」などの句がある。韋臯には晩年、玉簫という歌妓がいたが、早い時期には薛濤以外に

いわゆる美人の存在は見えないので、王建の詩中の美人は薛濤をおいて他にない。

李徳裕が劍南西川節度使になったのは大和四年（八三〇）十月、翌年の秋、孔雀が死に、籌辺楼が落成して、薛濤は詩を献じて祝賀している。大和六年（八三二）春、薛濤は李徳裕の「棠梨花」詩に和しているが、その夏、亡くなり、李徳裕は「傷孔雀及薛濤」という詩を作ったが、李徳裕の詩集には無い。劉禹錫はそのとき蘇州刺史であり、「和西川李尚書傷孔雀及薛濤之什」という詩があり、劉禹錫の詩集に現存する。ならば、李徳裕のその詩も確かにあったのである。

劉禹錫が李徳裕に和した詩に「玉兒已逐金環葬、翠羽先隨秋草萎。唯見芙蓉含曉露、數行紅淚滴清池」といい、この詩の起句は薛濤の死を悼んでいる。三四句は薛濤が死んだときがまさに夏であり、蓮の花が盛んに咲き、秋になれば散る、薛濤の詩に「芙蓉新落蜀山秋」の句があるのが証拠である。そのとき芙蓉はまだ曉の露を含み、紅い涙が池に滴るようであり、薛濤の死が夏であったことを知るのである。第二句に孔雀の死が秋であったことを詠じているのは自ずから明らかであり、「先隨」の二字は特に注意すべきである。孔

雀の死は薛濤の死の前の年の秋であることを指している。それを第二句にしたのは、人を重んじ、物を軽んじたからである。

白居易は大和六年（八三二）十一月劉禹錫に返信し、「前月廿六日、崔家送終事畢、乃至金環翠羽之悽韻」云々という。崔家の喪とは崔群が大和六年（八三二）八月に亡くなり、十月に葬送されたこと。手紙に「前月」とあるのは十月のことである。そのとき白居易は洛陽におり、劉禹錫の詩を得たのはこの月であろう。次の月に劉禹錫に返事を書いたのである。その手紙は『淳熙秘閣続法帖』第五卷に収められている。

張篷舟箋『薛濤詩箋』一九八三年人民文学出版社、
張篷舟箋張正則・季国平・張雅統箋『薛濤詩箋 修訂版』二〇一二年
（第二版）人民文学出版社

*張氏は、劉禹錫が李徳裕に和した詩を手掛かりに、大和五年秋に孔雀が、その翌年夏に薛濤が死んだと推定している。

三、武元衡の孔雀を詠じた詩とそれに和した王建の詩

四川使宅有韋令公時孔雀存焉。暇日與諸公同翫。座中兼故府賓
妓興嗟久之、因賦此詩、用廣其意。 武元衡

四川使宅に韋令公時の孔雀の存する有り焉。暇日諸公と共に
翫べば、座中に故府の賓妓を兼ね、興嗟すること之を久しくす、
因りて此の詩を賦し、用いて其の意を広くす。 武元衡

荀令昔居此 荀令 昔此に居り

故巢留越禽 故巢 越禽を留む

動搖金翠尾 金翠の尾を動揺し

飛舞碧梧陰 碧梧の陰に飛舞す

上客徹瑤瑟 上客 瑤瑟を徹し

美人傷蕙心 美人 蕙心を傷ましむ

會因南國使 会ず南国の使に因り

得放海雲深 海雲深きに放さるるを得ん

〔全唐詩〕卷三百一十六

*荀令…荀彧のことか。従軍中に病死。荀令君と呼ばれた。韋臯を喩
えている。

和武門下傷韋令孔雀

王建

武門下の韋令の孔雀を傷むに和す

王建

孤號秋閣陰 孤号す 秋閣の陰に

韋令在時禽 韋令在りし時の禽

覓伴海山黒 伴を覓むれば海山黒く

思郷橘柚深 郷を思えば橘柚深し

舉頭聞舊曲 頭を挙げて旧曲を聞き

顧尾惜殘金 尾を顧みて殘金を惜しむ

顛顛不飛去 顛顛して飛び去らず

重君池上心 君が池上の心を重んず

〔『王司馬集』卷三〕

傷韋令孔雀詞

王建

韋令の孔雀を傷むの詞

王建

可憐孔雀初得時 憐れむべし 孔雀 初めて得る時

美人為爾別開池 美人 爾が為に別して池を開く

池邊鳳凰作伴侶 池辺の鳳凰 伴侶と作り

羌聲鸚鵡無言語 羌声の鸚鵡 言語無し

雕籠玉架嫌不栖

雕籠 玉架 嫌いて棲まず

夜夜思歸向南舞

夜夜 帰るを思い 南に向かいて舞う

如今憔悴人見惡

如今 憔悴すれば 人見て悪み

萬里更求新孔雀

万里 更に求む 新たな孔雀を

熱眠雨水饑拾蟲

雨水に熱眠して 飢えて虫を拾い

翠尾盤泥金彩落

翠尾 盤泥に金彩落つ

多時人養不解飛

多時 人養えば 飛ぶを解せず

海山風黒何處歸

海山 風黒く 何れの処にか帰らん

『王司馬集』卷二

*孔雀を贈られた韋臯が亡くなってからも生き残っていた孔雀を愛でながら、武元衡は、きつと南国に連れ帰って放してやると詠じている。それに和した王建は、「武門下の韋令の孔雀を傷むに和す」と題し、憔悴した孔雀が韋臯の恩を重んじて飛び去らないと詠じ、「韋令の孔雀を傷むの詞」では、美人が孔雀のために池を掘らせたことを詠じている。王建の詩題に「傷む」という字が見えるが、それは死んだ孔雀を悼む意味ではなく、生きている孔雀を可哀そうに思う意味である。

四、李徳裕の「孔雀の尾の賦」

孔雀尾賦并序 李徳裕

故人以孔雀見遺、死於中途。將命者提挈一本、作携空籠與翠尾皆至。余憫而爲賦。

孔雀の尾の賦並びに序 李徳裕

故人孔雀を以て遺られ、中途に死す。命を將おこなう者一本を提挈し、作はじめて空籠と翠尾とを携えて皆至る。余憫れんで賦を爲る。

感君子之嘉惠 君子の嘉恵に感じ

意未忘於所知 意未だ知る所を忘れず

携珍禽以贈余 珍禽を携え以て余に贈る

諒有貴乎羽儀 諒に羽儀より貴き有り

去舊國之岑寂 旧国の岑寂を去り

歴三湘之嶮巖 三湘の嶮巖を歴たり

念未飛之衆雛 未だ飛ばざるの衆雛を念い

懷獨宿之羈雌 独宿の羈雌を懷う

忽哀鳴而望絶 忽ち哀鳴して望み絶え

遂委翼而長辭 遂に翼を委ねて長とこしえに辞す

異黃鵠之高翔

黃鵠の高翔と異なり

揭空籠而載馳

空籠を掲げて載馳す

想綵羽而不見

綵羽を想いて見ず

靚修尾而增悲

修尾を靚て悲しみを増す

蘭色革鬱金華

蘭色革鬱たる金華

陸離垂之兮疑

陸離として之を垂らして疑う

拖綠盪音戾綬

緑を拖く盪 音は戾の綬

名舉之兮如飛

名は之を挙げ飛ぶが如し

翠綉嗟絨冕之寄身

翠綉 絨冕の身を寄すること

與鍛翮而一概

翮を鍛くと一概なるを嗟く

雖暫榮而可樂

暫く榮えて楽しむべしと雖も

終以飾而賈害

終に飾を以て害せらるるを賈く

况復德輶如毛而鮮

況んや復た德輶きこと毛の如くして鮮なく

舉福輕乎羽而莫載 福を挙ぐるここと羽よりも軽くして載する莫

し

何必負斯尾之翹翹

何ぞ必ずしも斯の尾の翹翹たるを負い

冒長途而效愛

長途を冒して愛を効さんや

*序に「故人」というのは韋臯のことであろう。武元衡が蜀に赴任した際にはまだ生きていた孔雀は、その後、李徳裕が蜀に赴任したときにはもういなかったであろう。李徳裕は韋臯が南国から贈られた孔雀の尾と籠とを持ってこさせ、その孔雀を憐れんで、賦を作ったのである。

この賦があるからには、李徳裕が劍南節度使在任中に韋臯ゆかりの孔雀が死ぬということはあり得ず、したがって、孔雀が死んだ翌年に薛濤が死ぬということもあり得ない。韋臯ゆかりの孔雀は、李徳裕が蜀に赴任する前にすでにいなくなっていたと思われるからである。

さらに、武元衡が孔雀を詠じた詩に和した王建の詩題や、詞題に「傷む」とあるように、生きている孔雀を可哀そうに思う意味で「傷む」と表現するのであって、李徳裕の詩題にいう「傷む」も、節度使在任中に亡くなった孔雀を悼むという意味ではない。

李徳裕は、すでにいなくなってしまった孔雀の生前の境遇を可哀そうに思っ、て、「孔雀の尾の賦」を詠じたのである。

五、劉禹錫の詩を再び検討する

和西川李尚書傷韋令孔雀及薛濤之什 劉禹錫

西川の李尚書の韋令の孔雀を傷む及び薛濤の什に和す

玉兒已逐金環葬 玉兒已に金環を逐いて葬られ

翠羽先隨秋草萎 翠羽先ず秋草に随いて萎ゆ

唯見芙蓉含曉露 唯だ見る 芙蓉 曉露を含み

數行紅淚滴清池 數行の紅淚 清池に滴るを

(注) 後魏元樹南陽王禧之子、南奔到建業、數年後、北歸。愛姬

朱玉兒脱金指環為贈。樹至魏、却以指環寄玉兒、示有還意。

後魏の元樹、南陽王禧の子、南奔して建業に到り、數年後、北歸

す。愛姬 朱玉兒、金の指環を脱し、為に贈る。樹 魏に至り、却

つて指環を以て玉兒に寄せ、還る意有るを示す。

四部叢刊『劉賓客外集』卷七

*「禧」「北」「朱玉兒」は四庫全書『劉賓客外集』卷七に拠って改めた。

*劉禹錫は、李德裕の「韋令の孔雀を傷む」という詩と薛濤の詩に和した。薛濤の詩は李德裕と同題の詩ではなかったから、「薛濤の什」

とだけ言ったのであろう。

第一句「玉兒已逐金環葬」は、張説は薛濤を悼んだ句だとするが、薛濤には「金環」すなわち指輪に関わる逸話は残されていないので、本当に薛濤を悼んだ句であるかどうかわからない。しかし、この劉禹錫の詩には、北朝の元樹が南朝にいたときに愛した朱玉児という娘から、北へ帰る際に指輪を贈られ、北朝に帰り着いたら、朱玉児にその指輪を送り返して、南に戻ってくるという気持ちを伝えたという逸話が注として付されている。元樹と朱玉児の指輪を介した逸話は、いったい何を喩えているのだろうか。

それを考えるには、韋臯と玉簫の指輪を巡る次の逸話が参考になる。その要約を掲げる。

唐の西川節度使の韋臯は、若い時江夏に遊び、姜使君の館に滞在した。姜家に荆寶という男の子がいて、韋臯を兄のように慕い、荆寶の侍女で、十歳の玉簫も韋臯に仕えていた。その後、韋臯と荆寶は別れることになり、荆寶は玉簫を韋臯に従わせようとするが、臯は天子との謁見の予定が遅れているためにその申し出を固辞し、短ければ五年、長ければ七年したら玉簫を娶ると約束し、玉の指輪

と詩一首を贈った。しかし、五年経っても来ず、八年目の春、玉簫は絶食して死に、中指に韋臯から贈られた指輪をはめられて葬られた。

後に韋臯は蜀を鎮めることになった。節度使の府に着いて三日、囚人を審理した際、その中に荆寶がいて、冤罪だったことがわかったので、放免して復職させ、玉簫のことを尋ねた。荆寶から玉簫が絶食して死んだことや死ぬ前に「留贈玉環」という詩を残したこと聞いた韋臯はとても嘆き、写経や造像をして玉簫の真心に報いようとしたが、再会することは叶わなかった。しかし、死者を呼び出せる者がいて、韋臯に齋戒させると、ある夜玉簫が現れ、貴方の真心に応えて甦りました。十三年後には再び侍女となって貴方のご恩にお報い致しますと言った。その言葉どおり、韋臯の誕生日に、東川の盧八座が、玉簫という名の、十六にならない歌姫を贈ってきた。見ると、死んだ玉簫と瓜二つ。中指にはうっすらと指輪のはまった形が見て取れた。

『蜀中廣記』卷七十七所引『雲溪友議』

*韋臯は仕官する前に愛した玉簫に指輪と詩を贈って結婚の約束したが果たさず、玉簫は絶食して死に、韋臯から贈られた指輪を嵌め

られて葬られたという逸話は、細部が相違するけれども、劉禹錫の詩に付された、元樹と朱玉児の指輪を介した逸話と共通する要素を持っている。どちらも指輪を使って自身の愛を示す点は共通する。そして、女性の名も、「玉」が共通している。

ゆえに、劉禹錫の詩の第一句「玉兒已逐金環葬」は、薛濤のことを悼んでいるのではなく、韋臯と婚約していた玉簫が、約束を違えられ、絶食して死に、指輪を追いかけるかのように葬られたという意味なのではないだろうか。元樹と朱玉児の逸話は、韋臯と玉簫を喩えていると思われる。

第二句「翠羽先隨秋草萎」には孔雀が衰えたことを詠じ、韋臯ゆかりの玉簫も、孔雀も、李徳裕が蜀に赴任したときにはもうともにいないという無常を表現し、後半の李徳裕が目になっている現状描写につなげているのであろう。

第三、四句「唯見芙蓉含曉露、數行紅淚滴清池」には、李徳裕の目の前には蓮の花が暁の露を帯び、はらはらと紅い涙を清らかな池に滴らせていると結び、残されているのは孔雀のために掘った池だけだと詠じている。

六、薛濤の卒年を考えるための略年譜

貞元元年（七八五）六月 韋臯が劍南西川節度觀察使となる。まもなく南詔より孔雀を献上され、薛濤の意向によって、節度使宅に池を掘らせる？（張篷舟説 以下張説と略す）

貞元十二年（七九六）正月 韋臯が檢校左右僕射、同中書門下平章事を加えられた。

薛濤 「罰赴邊有懷上韋相公二首」「十離詩」 韋臯同中書門下平章事在任中？

十二月 迴紇、南詔、劍南西山国の女国王が揃って朝賀に来た。

（*このころ、韋臯は南詔より孔雀を献上された？）

永貞元年（八〇五）八月 韋臯死去。

元和二年（八〇七）十月 武元衡が劍南西川節度使となる。

（この間、武元衡は韋臯の孔雀を詠じる）

元和八年（八一三）二月 武元衡が中書知政事、崇玄館大学士、太清宮使として中央にもどった。

元和十年（八一五）六月 武元衡殺さる。

大和四年（八三〇）十月 李徳裕が劍南西川節度使となる。

大和五年（八三一）秋 韋臯の孔雀死ぬ（張説）？

薛濤「籌邊樓」

大和六年（八三二）春 薛濤「棠梨花和李太尉」（張説）？

夏 薛濤死去（張説）？

十一月 段文昌劍南西川節度使となる。

十二月 李徳裕兵部尚書となる。

大和八年（八三四） 劉禹錫は任期が満ちて入朝し、汝州刺史を授かり、太子賓客に遷って、東都に分司した。「汝洛集引」に

「太和八年、予、姑蘇より臨汝に転ず」（『劉賓客外集』卷九）

とあるので、劉禹錫が太子賓客になったのは大和八年より後のことであろう。

薛濤「和劉賓客玉薜」？

大和九年（八三五）二月 劍南西川節度使、檢校左僕射、同平章事の段文昌死去。死ぬ前に薛濤の墓誌を書いた？（ただし、その墓誌は今に残らない。）

開成元年（八三六） 劉禹錫は開成の初め、復た太子賓客となつて分司した。

○₁ 薛濤「和劉賓客玉薜」？

*略年譜で確認するとわかるように、張篷舟氏の説に従うと、韋臯が贈られた孔雀は、貞元元年（七八五）から大和五年（八三一）までの四十六年間も生きていたことになる。さすがにそれほど長生きする孔雀はめったにいないのではなからうか。では、薛濤はいつごろまで生きていたであろうか。その卒年は正確にはわからなくても、少なくともいつまでは生きていたということだけでも考えられるであろうか。そうした観点から見ると、現在残されている手掛りの中で、薛濤の作である「和劉賓客玉薜」は最も有力なものと思われる。長く左遷されていた劉禹錫と、ほとんど蜀にいたと思われる薛濤とが詩のやり取りをするようになったのは、おそらく蜀に赴任した李徳裕を紹介してではないかと思われ、李徳裕が蜀を去って以降も二人は詩のやり取りを続けたと想像できる。もし、劉禹錫が二度目に太子賓客になった際に薛濤が「和劉賓客玉薜」を作ったとしたら、薛濤は少なくとも開成の初めまで生きていたことになる。しかしそれでは、大和九年二月に亡くなった段文昌が薛濤の墓誌を書いているという事実と抵触してしまうが、その記載があるのは元・費著の『牋紙譜』であり、しかも墓誌は今に残っていない。一方、薛濤の「和劉賓客玉薜」は南

宋・洪邁の『萬首唐人絶句』に収録されていて、元よりは時代が古いのである。今のところ、段文昌が薛濤の墓誌を書いていたならという条件付きではあるが、薛濤が開成の初めまで生きていた可能性があることだけを提示しておきたい。薛濤の卒年を明らかにする根拠を見出すことはできないが、今後、研究が進んで、究明できる日が来ることを期待したい。

以上